



次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

著作権上の都合により未掲載

著作権上の都合により未掲載

著作権上の都合により未掲載

問一 Ⅱ アのカタカナを漢字に直し、イはその読みがなをひらがなで書きなさい。

問二 (a) (c) に適当な漢字一字を補いなさい。

問三

A	く	C
---	---	---

に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

ア へ Aさて	Bしかし	Cところで	～	イ へ Aしかし	Bところで	Cさて	～
ウ へ Aさて	Bところで	Cしかし	～	エ へ Aところで	Bしかし	Cさて	～

問四 Ⅰ ①「図鑑少年にとってはうれしい獲物なのである」とあるが、どんな点が「うれしい」のか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 図鑑で虫の名前をいろいろと覚える結果、チビクワのようなゴミムシにまで興味をもてるようになる。
- イ 図鑑のおかげでチビクワというなかなか出会えない種類の虫についても前もって知識が持てるようになる。
- ウ 一見してゴミムシのような小さな虫が、図鑑のおかげで、それもじつは立派なクワガタの一種だとわかる。
- エ 一見してゴミムシのような小さな虫の「チビクワ」という専門的な名前を、図鑑によって知ることができる。

問五 Ⅱ ②「わりと即物的な名前が多かった」とあるが、いろいろな虫にカタカナの即物的な名前がつけられる例として最も分かりやすい一文を抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問六 ― ③「図鑑の世界観のようなもの」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 実際に昆虫採集をする動機づけとして重要な役割をはたそうとする使命感。
- イ 表面的には見えづらい小さな違いを発見したり知ることを大切にする価値観。
- ウ 小さなことの一つ一つにこだわりをもって何でも分類しようとする学問的な姿勢。
- エ 実物をそのとおりにカラー図解し、迫力ある構図で明解に表現しようという意気込み。

問七 ― ㉠、㉡について。「おっちゃん（年長者）」のいう「ゲンジ」と「ヘイケ」にはどのような違いがあると考えられるか。本文から読みとれるすべての可能性をおさえながら、両者の違いを書きなさい。

問八 ― ④「自己中心的で独善的な怪物」とは、昆虫図鑑のどのような点をたどて言ったものか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 子どもの真っ白な頭に住み着いて彼らを支配する
- イ 大人からものを教えてもらうことに反発させる
- ウ 子どもの社会で代々継承するシステムを崩壊させる
- エ 昆虫方言という地方独自の名を駆逐し、絶滅させる

問九 ― ⑤「文化の一断片が絶滅した瞬間」とはどの時点のことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 大人たちが「独自の呼び方」を子どもたちに教えた時点。
- イ 大人たちの「独自の呼び方」を子どもたちが聞き流した時点。
- ウ 図鑑で覚えた和名が絶対なのだと、子どもたちが確信した時点。
- エ 和名が絶対だと確信する子どもたちに、大人たちが異を唱えなくなった時点。

問十 空欄 D に入る漢字二字の言葉を、文中から探して書きなさい。

問十一 ― ⑥「虫に比べて魚の名前はずいぶんくましい」とあるが、昆虫と魚類の間にそのような差ができる理由を説明したものと最も適当なものを次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 昆虫に比べると魚類は学問として研究されてきた歴史が浅く、分類がまだまだ不十分であり、魚類図鑑の刊行も少なく、そのせいで人々が魚類の学問的な名称に触れる機会があまりにも少なかったから。
- イ 魚類に代表される海洋生物は昆虫に比べて圧倒的に種類が多く、また、形状も千差万別で昆虫のような即物的な和名をつけるのが難しいため、そもそも専門的な名前を覚えることが困難であったから。
- ウ 昆虫が学問的であり、少年時代の知的興味の対象に限られる傾向が強いのに対し、魚類は伝統的に地域や世代を問わず釣りという遊びの対象であったり、食卓に上るという点で人々に親密なものであるから。
- エ 海洋資源国として魚類とは太古の昔からのつきあいがあり、神話や昔話に登場させたり、成長に応じて呼び名を変えるほど魚類を愛してきた日本人にとって図鑑的な呼び名は味気ないと感じられてしまうから。

このページは白紙です。

二

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「その投げ方じゃ、だめだな」

いきなり背後から聞こえた声に、純也はびっくりして、ボールを投げようと振り上げていた手を思わず止めた。

振り返ると、伊予灘^{いよなだ}の方角に沈もうとしていた夕陽が目飛び込んで、相手が黒い影にしか見えなかった。草叢^{くさむら}に立つ自分より背の高い影が、また声を上げた。

「その投げ方じゃ、カーブは曲がらないぞ」

純也は夕陽にグローブをかざし、相手の顔を見た。てっきり年長の男児だ、と思っていた影が、スカートを穿^はいているのに気付く、よけいにびっくりした。

両手を威張ったように腰に当て、仁王立ちしている恰好^{かっこう}は、スカートを穿いていなければ、年長の男児にしか見えない。このあたりでは見かけない顔だった。

「何だ？ おまえは……」

純也は驚かされたことに腹が立って、ぶっきら棒に言った。

「だから、その投げ方じゃ、カーブは投げられないって言うんだ」

相手も怒ったように言い返した。

純也はたじろいだ。しかしすぐに相手が自分とそう年が変わらない少女だということに気付いて、

「放っとけ」

と怒鳴り返した。

純也はボールを投げていた廃工場の壁にむき直って、左足を上げ右腕を背後に引いた。投げようとした瞬間、

「だめだって、それじゃ」

と相手が大声を出し、純也の指先を離れたボールはとんでもない方向に転がってしまった。

ハッハハハ、相手が笑った。純也は頭にきて少女を睨^{にら}み付けた。

「おまえ、うるさいんだよ。あっちへ行け」

それでも少女は白い歯を覗^{のぞ}かせて、笑っている。純也は[A]打ちをして、ボールが消えて行った草叢の方に走り出した。ボールを拾い、マウンド代りにしていた場所に戻ろうとすると、少女はまだそこに立っていた。純也は相手を見視する

ことに決めた。

純也は壁にむかってボールを投げた。力んで投げてみるのだが、上級生の投手が投げるようにカーブが上手く投げられなかった。同じ歳の少年の中では、純也は一番速い球を投げる事ができると自負していたし、ストライクを何球も続けて放ることができた。来春、三年生になれば、町内の年少組の野球部に入れる。そこで純也はピッチャーをやりたいかった。しかし少女が言ったように、カーブが上手く曲がらない。

——うん？

純也は投げるのを止めて、首をかしげた。

——なぜ、あいつ、俺がカーブを投げる練習をしとるのがわかったんだ？

純也は少女の方を振りむいた。少女は同じ姿勢で立っていた。

「あのさ、その握り方じゃ、ボールは曲がらないんだよ」

——握り？ 何を言ってるんだ、こいつ……。

純也は眉を上下して、少女を見直した。

聞き慣れない言葉遣いもそうだが、相手の言い方にはどこか自分を馬鹿にしているような感じがあった。

「じゃ、おまえがカーブを投げられるんなら、投げてみるや」

純也が言うと、少女は、いいよ、と平然とした顔で歩み寄り、

純也の手からボールを取り、壁にむかって背筋を伸ばして立ち、ボールを握った左腕を二度ぐるぐると回転させた。

——サウスポーか……。

純也が胸の中で呟いた時、少女は右足をゆっくりと上げ、右手を前に突き出し、左手を大きく上げて一気に振りおろした。ボールは壁の手前でブレーキがかかったようにカーブし、純也が壁にチョークで描いていたストライクゾーンの真ん中に当たり、ポンという乾いた音を立てた。

純也は口を半開きにして、壁と少女をアコウゴに見た。ボールもよく曲がったが、それ以上に少女の投げたボールには迫力があった。

——な、なんだ、こいつは……。

① 少女は少し不満そうな顔をして、首をかしげていたが、純也を見てにこりと笑った。そうして草叢に入り、ボールを拾って戻ってくると、ボールを握った手を純也に見せた。

「ほら、人さし指と中指をこうやって少し外にずらすんだ。やってみな」

純也は少女が握って見せたやり方で、ボールを握ってみた。

「違うよ。もう少し外にずらすんだ」

純也が指をずらすと、ボールが手からこぼれ落ちた。少女はボールを拾って純也に渡し、ぎこちなくボールを握っている純也の指の上から彼女の指を覆い被せるようにした。温かい手だった。

「ほら、こうだよ。親指もしっかり握ってないとだめだ。ちいさい手だな……。でも毎日練習すれば握れるようになるよ」

そう言われて少女の手を見ると、純也よりひと回り大きかった。

「こうしてごらん」

少女は言って、左手の人さし指と親指の腹を合わせて、パチンと音を立てた。純也は右手の指で同じようにしたが、音など出なかった。

「ボールを放す時、この感じで放すんだ。すぐにできなくても、きつとできるよ」

そう言って少女は左手を振りおろしながら指で音を立てた。

「はあ……」

② いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純

也は B を囁んだ。

「おまえ、どこの誰や？」

純也が言って顔を上げると、少女はもう草叢のむこうまで走り出していて、頑張れよ、と男のような言葉を残して立ち去った。

——中略——

週末の午後、純也は附属小学校のグラウンドにグローブを持って年長組の練習を見にいった。

土曜日は年長組がふた手に分かれて試合をする。人数が揃っていないと純也は試合に入れて貰えることがある。

正門の脇を走り抜け、グラウンドに入ると、マウンドの所に皆が集まっていた。

ベンチに座っていた同級生のユキオに純也は訊いた。

「試合はせんのか。あそこに集まって皆何をしとるんじゃ？」

「変な女児が入ってきて、野球をさせろと言うとる。上級生がだめじゃ言うても、やらせろ言うてきかん。馬鹿じゃなかるかの」

ユキオが C をすくめて言った。

「だから一回打たせてよ」

年長組の選手の輪の中から大声が聞こえた。

「あっ、あの女兒じゃ」

純也は思わず声を上げた。

三日前に廃工場跡の草叢で逢った少女が年長組の中で、腰に手を当て大声で何かを言っている。

打てんなんて、やめとけ。だから打たせてみる。ボールが当たって泣いてもしらんぞ。泣くもんか、そのかわり打ったら仲間に入れろよ。生意気な口をきく女兒じゃの……。

年長者たちは少女に根負けしたのか、投手の一人がマウンドに残り、少女がバットを手にしてバッターボックスに入った。皆ニヤニヤと笑って少女を見た。

手加減はせんからな、とマウンドの投手が言った。少女は左バッターボックスに立っていた。マウンドの投手はチームのエースではなかったが、純也などにはとても打てない速いボールを投げる投手だった。

尻にぶつけてやれ、誰かが大声で言って、皆が笑い出した。マウンドの投手が真剣な顔で少女を睨んでいた。少女は平然とバットを構えている。投手の左足が上がり、少女にむかって

ボールが投げられた。

カーン、と乾いた音がして、少女が打った打球がセンターの後方にむかって上昇した。打たれた投手も、見物していた年長者たちも、純也も、ユキオも、その打球を口を開けたまま見上げていた。

「あれ、まあ……」

隣りでユキオが素頓狂な声を上げた。

ムキになった投手が、女兒だから手加減をしたから、もう一回打ってみろ、と言い出し、それから三球投げたが、少女は三度とも同じように軽々とホームラン性の打球を打ち返した。年長者たちは皆黙り込んでしまったが、圧巻は試合に入った少女が投手としてマウンドに立つてからだった。ボールが速い上にコントロールが抜群に良かった。おまけに落差のある変化球を投げた。選手たちは少女のボールにバットを当てるのが精一杯だった。

③ 年長者たちは少女に手玉に取られたのが口惜しかったのか、三回を終えると、今日はやめた、と言い出して、グラウンドを引き揚げていった。

グラウンドには少女と純也の二人だけが残った。

「君、この間のカーブを練習していた子だろう」

「おまえ歳はいくつなんだ？」

「女の子に歳を聞くもんじゃない。十歳だよ」

「十歳！ 本当かよ？」

純也はびっくりして、少女を足元から頭の先まで見直した。自分とひとつしか歳が違わない。

「君、キャッチボールをしないか」

「いいけど、おまえはグローブがないじゃないか。よし、俺のを貸してやるよ。俺は素手で大丈夫じゃから」

純也がグローブを少女に投げると、④ 少女はクスッ、と笑って左手にグローブをはめた。

「そうか、おまえ左ききだものな」

「平気だ。私が受けるからカーブの練習をしてみろよ」

⑤ そう言って少女はスカートを内股に入れて、その場にはやがみ込んだ。こんな恰好を平気でする少女は見たことがなかった。

「よし、投げろよ」

少女がグローブを叩いた。純也はボールを持ったまま立っていた。

「どうした？ 早く投げろ」

「……おまえやっぱりおかしいよ。女兒なんじゃから……」

純也が言うと、少女は急に怒ったように、純也にグローブを投げ返しグラウンドを去っていった。

翌日、母が一日仕事があるので、純也は淑子の病院へ行った。

淑子は熱が下がって、ベッドに座って絵を描いていた。

「今日は調子が良さそうじゃの」

淑子が元気だと純也も嬉しくなる。

「兄ちゃん、中庭に出たい」

「そうか、じゃ看護婦さんに聞いてくるわ」

純也はナースセンターに行き、淑子と中庭に出ていいか、と訊いた。少しかまわなと言われ、車椅子を借りて中庭に出た。

青空がひろがり、十一月にしては暖かい陽気だった。中庭には見舞いにきた人たちが入院患者と談笑していた。

純也は車椅子を押して、中庭の池のほとりに淑子を連れていった。淑子は空を見上げている。純也も空を見上げ、今頃、グラウンドで皆が野球をしているのだろう、と思った。

「母ちゃん、今日は仕事言うてたね」

「ああ、朝早うに出て行つた」

中庭にいる人たちはほとんどが家族連れで、子供二人でいるのは純也と淑子だけだった。

「淑子も早う良くなつて、また相子が浜へ海水浴に行こうな」

「良くなるかな……」

淑子が弱々しい声で言った。

「良くなるに決まっとる。今日くらい元気なのが続いたら、すぐに退院できるって」

そうは言つたものの純也にも淑子の病気が良くなっているのかどうかはわからなかった。

母に妹の具合を訊いても、この頃は、ちゃんと答えてくれなかった。

「綺麗な帽子……」

淑子が声を上げた。

「えっ、何を言うたんじゃ」

「あの帽子、綺麗……」

淑子が指さした池のむこう側に、車椅子に乗った白髪の老人と並んで、少女と母親らしき女性が歩いていて。その少女が白

いワンピースと同色の帽子を被^{かぶ}っていた。秋の陽差しに帽子の白とピンク色のリボンがかがやいていた。淑子は少女の帽子を綺麗と呟^{つぶや}いていた。

——なんや金持ちの家の子やな……。

時折、車椅子の老人に笑いかける少女の身のこなしには品があり、いかにも良家のお嬢さんといったたずまいをしていた。

母子連れと付添婦に車椅子を押された老人が、池の縁^{いし}に沿ってゆつくりと純也たちの方にむかつて歩いてくる。淑子は少女をじっと見つめていた。

「淑子、そろそろ戻ろうか」

純也が言うと、⑥淑子が純也の腕に手をかけて、少しこのままにして欲しい、という仕草をした。

——淑子も女の子やから、ああいう恰好がしたいのじゃろうか……。

純也は胸の中で、そう思いながら、近寄ってくる少女を見た。

「あっ、あいつじゃ」

純也は思わず声を上げた。

少女も純也の顔を見て、一瞬、顔色を変えた。スカートを穿いたまましゃがみ込んだ少女とは、まるで別人のように映った。

少女は老人と母親が話をはじめた時、純也にむかつてウィンクした。そうして純也の隣りにいる淑子をちらりと見て、老人の方に笑いかけた。

——どうなっとるんじゃ……。

純也が呆^{あは}気にとられていると、

「淑子もあんな帽子が被^{かぶ}てみたい」

淑子がぼつりと言った。

その日の午後から、淑子は帽子を被^{かぶ}って丘の上に立っている自分の姿を絵に描きはじめた。

翌夕、純也が廃工場の壁にむかつてボールを投げていると、

おしい、と声がして草叢のむこうから、人影が手を振って近づいてきた。

見ると、あの少女だった。スカートではなくスラックスを穿いていた。手にはグローブを持っていた。

「⑦これならいいだろう。さあ、キャッチボールをしようぜ」

純也は笑つてうなずき、ボールを投げた。

「おっ、曲がるようになったじゃないか」

少女が嬉しそうに言った。

「ふん、おま、えなんかすぐに抜いてやるぞ」

「私は、おま、えじゃない。カオルって言うんだ」

そう言つて少女は笑つてボールを投げ返した。カオルもカーブを投げてきた。純也はあわててグローブをずらしたが、ボールはグローブの土手に当たって取りそこねた。

「ハッハハ、それじゃ、君は私を抜けないよ」

「俺は、君じゃない。純也って言うんだ」

純也はボールを思いつ切り投げ返した。

「ジュンヤって言うのか。今のはいいボールだ」

少女も思い切つてボールを投げ返した。

「カオル、誰に野球を教わったんだ」

「パパだ。パパは名選手だった」

二人は陽が沈むまでキャッチボールを続けた。

「俺はもう家に戻んなきゃいけない。病院に行くんだ」

「……そうか。あの子はジュンヤの妹なのか？」

「そうだ」

「顔が似ていたものな。病気は大変なのか」

純也が一瞬、顔を曇らせると、

「あそこはいい病院だから大丈夫だ。私のお祖父ちゃんも退院

できるかもしれないと言っていた」

「あの人はカオルの祖父ちゃんなのか」

「そうだ。ママのお父さんだ。東京からママと二人で見舞いに来たんだ」

クスッ、と純也が笑うと、カオルが純也を見返して、何が可笑しいんだ、と訊いた。

「ママって言ったのがだ」

「可笑しいか」

「おまえが、いやカオルが言うのと可笑的い。それにこの間の病院での恰好も可笑しかった」

「しょうがないじゃないか。ああしないとお祖父ちゃんは喜ばない」

カオルが **D** をふくらませて言った。

「……そうか、悪かった」

純也が謝ると、カオルが右手を差し出した。純也も手を差し出し、握手した。カオルの手は温かった。カオルが言った。

「ありがとう」

「何で、ありがとうなんだ？」

「女の私と、一生懸命にキャッチボールをしてくれて」

「何を言ってるんだ。じゃ、またな」

純也は走り出して、急に立ち止まり、カオルを振りむいた。「もしかまわなかったら、あの日被っていた帽子を少しでいいから貸してくれないか」

「帽子？ あっ、あれはだめだ。亡くなったパパが買ってくれたものだから。他の帽子ならいい。でも帽子なんかどうするんだ？」

純也は淑子が、カオルの帽子の絵を描いている話をした。カオルは **ウ** 険しい表情をして純也の話を聞いていたが、きっぱりと言った。

「でも、あの帽子は絶対にだめだ」

「そうか、大切なものだな。じゃあな」

純也は言って、家にむかって走り出した。

家に帰ると、玄関の鍵がかかったままだった。母がまだ仕事先から戻っていないのだ、と思った。裏に回って鉢植えに仕舞ってある鍵を取って戻ると、純也の名前を呼ぶ声がした。『魚勝』の女将だった。

「純ちゃん、病院からさっき電話があってヨッちゃんの容体が急に悪くなったから、すぐに病院に来てくれて」

「えっ、それで母ちゃんは」

「富子さんがどこに居るのかわからないのよ。旅館に電話を入れたら、今日は休んでるって。今朝は一緒に家を出たんでしょ」

純也は今朝方、思いつめたような顔をしていた母の横顔を思い出した。

「俺、すぐに病院へ行く。おばさん、母ちゃんが帰ってきたら淑子のことを伝えて」

「わかったわ」

純也は女将にグローブを預けて、**E** 一目散に駆け出した。淑子は集中治療室に入っていた。顔馴染みの看護婦が母のことを尋ねたが、純也には返答のしようがなかった。純也は廊下の椅子に座って、母が来るのを待った。そうして淑子を助けて欲しい、と祈った。純也にはそれ以外にできなかった。

— 中略 —

純也が目覚めると、母の手が肩を抱いていた。

「母ちゃん、淑子は？」

純也が訊くと、母は笑みを浮かべて、

「大丈夫だったわ。昨晩はごめんね」

と言って肩を叩いた。純也は首を横に振り、ガラス越しに集中治療室のベッドに寝ている淑子を見た。背後に母が寄る気配がした。

「純也、今日、学校は行けそう？」

「うん、行くよ。俺、顔を洗ってくる」

純也は洗面所に行き、顔を洗った。

『魚勝』の女将に預けたグローブのことが気になった。廊下に出ると、昨夜の看護婦が、紙袋を手にとってきた。

「佐伯君、これを淑子ちゃんに渡して下さいって預かったわ」
渡された紙袋を覗くと、中に帽子が入っていた。

——カオルだ。

「看護婦さん、誰がこの袋を持ってきたの。その人まだどこかにいるの？」

「お母さんと娘さんの二人だったわ。タクシーを待たせていたから、もういないかもね」

純也は廊下を走った。玄関に出ると、一台のタクシーが坂道を降りるのが見えた。純也は玄関を飛び出し、タクシーを追

駆けた。

ワンピース姿のカオルが出てきた。

オーイ、オーイ、カオル、カオル、と純也は叫びながら走っ

「カオル、カオル、ありがとう」

た。スピードを上げたタクシーが遠ざかっていく。病院のある

純也が大声で言う、カオルは手を振ってから両手を口に当

丘の周りをタクシーは半周して、下の道に出る。純也は芝の上

で、

を転がるように走った。

⑧ 「ドンマイ、ジュンヤ」

大通りへ出る信号でタクシーは停車していた。純也はあらん

と叫んだ。

限りの声で、カオルの名前を呼んだ。信号が青にかわり、車が

（伊集院静「ぼくのボールが君に届けば」〈講談社〉より一部改）

動き出した。するとタクシーが側道に寄った。ドアが開いて、

問一 Ⅱ アーエのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みがなをひらがなで書きなさい。

問二 空欄 A Ⅰ D に当てはまる漢字一字を次の中から一つずつ選び、その符号を書きなさい。

ア 鼻 イ 目 ウ 口 エ 唇 オ 舌

カ 頬 キ 頭 ク 顔 ケ 手 コ 首

問三 Ⅰ ①「少女は少し不満そうな顔をして、首をかしげていたが、純也を見てにこりと笑った」について、このときの少女の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 純也の反応には不満だったが、納得のいく投球ができた。

イ 自分の投球には不満だったが、純也の反応には満足だ。

ウ ボールの曲がり方は不満だったが、真ん中に当たってよかった。

エ ボールの速さには不満だったが、純也を驚かせてホッとした。

問四 Ⅰ ②「いつの間にか少女にうなずいている自分」について、純也がこれとは正反対の態度を最も極端に示している一文を抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問五 Ⅰ ③「年長者たちは少女に手玉に取られた」について、年長者が少女に対して余裕のあったことがうかがえる一文を二つ抜き出し、それぞれ初めの五字を書きなさい。

問六 Ⅰ ④「少女はクスッ、と笑って左手にグローブをはめた」について、少女はなぜ笑ったのか。次の中から最も適当なもの一つを選び、その符号を書きなさい。

ア 少女は左ききなのに、純也が右きき用のグローブを貸してくれたから。

イ 純也の実力には不似合いな、立派なグローブを貸してくれたから。

ウ 自分よりも下手な純也が、ムキになってグローブを貸してくれたから。

エ 自分よりも実力があるかに下のくせに、気を遣ってグローブを貸してくれたから。

問七 Ⅰ ⑤「そう言って少女はスカートを内股に入れて、その場にしゃがみ込んだ」について、この行動からは考えられない少女の様子を最も端的に表した一文を抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問八 ― ⑥「淑子が純也の腕に手をかけて、少しこのままにして欲しい、という仕草をした」について、このときの淑子の希望はどういうものか。それが具体的に表れている一文を抜き出し、初めの五字を書きなさい。ただし、会話文は除く。

問九 ― ⑦「これならいいだろう」について、「これ」とはどういうことか。文中の語句を用いて具体的に、十五字以内で答えなさい。また、このセリフは以前純也が言ったどういうことに対してのものか。簡潔に答えなさい。

問十 ― ⑧「ドンマイ、ジュンヤ」について、「ドンマイ」は英語で、日本語の意味は「気にするな」であるが、スポーツ（特に野球）においては、「ガンバレ」と励ましの意味も含む言葉である。

このことを踏まえて考えると、カオルは「帽子のことは気にするな」という気持ちに加えて、ガンバレと純也を励ましたと解釈できる。では、カオルは純也に対して何をガンバレと励ましたのか。「――こと」につながる形で具体的に十字以内で答えなさい。